

6月号

JUNE 2025

MJIA

M A G A Z I N E



よくある風景 タミル・ナードゥ州 ペロール近郊

公益財団法人日印協会

住 所：〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6 麹町保坂ビル6階

電話 番号：03-6272-4408

<https://www.japan-india.com>



世界をつなぐ、あたらしい空へ。



目次

アニメの熱気、インドに燃え広がる！ 「アニメタイムズ」インド進出の舞台裏	4
インド紹介 アンドラ・プラデシュ州	8
インド勤務を振り返って 読売新聞 浅野友美（元ニューデリー特派員）個人会員	10
インド独立運動と日本の絆を辿る ーラス・ビハリ・ボース研究所&代表団による訪日ツアーの記録ー 個人会員 渡邊太一	16
インド映画公開情報 セテラ・インターナショナル	20
書籍紹介『インド工科大学マミ先生のノープロブレムじゃないインド体験記』	21
日印協会からのお知らせ	22
法人会員一覧	23

インドの良き食文化をお伝えする事が私たちの使命です。（全国配送承ります）



シタルのインドカレー
変わらぬ人気のカレー
をそのままのお味で、
ご家庭へ。

社長の増田泰親は学生時代、当時九段にあった印度料理アジャントでアルバイトとして入店し、大学卒業後はコックとして修業を積み、1981年に千葉市で印度料理シタルを創業いたしました。



アルフォンソマンゴードリンク
アルフォンソマンゴ
ーといえばシタル。自信ある逸品です。

社長の増田泰親が情熱を傾けるアルフォンソマンゴーから作る無添加ドリンクです。毎年インドの農園へ行き品質を確認して原料となるマンゴーを輸入しています。



野生黒蜂蜜 ハンティングビー
インド メルガートの自然保護区でハニーハンターによって採集される貴重な蜂蜜です。



おうちでつくれるチャイセット
インドのパザールで飲む味そのまま！おうちで簡単チャイキット。マサラとレシピ付。

アニメの熱気、インドに燃え広がる！ 「アニメタイムズ」インド進出の舞台裏

「ナマステ！お前はもう見ている！」海賊版が席卷する巨大市場インドで、日本のアニメ配信サービス「アニメタイムズ」がいかにして熱狂的なファンを掴みつつあるのか。アニメタイムズ社と出資社のひとつであるエイベックス・ピクチャーズの担当者が語る、トライ＆エラーの1年半と、現地のリアルな反応、そして未来への展望を追った。

近年、著しい経済成長とともにエンターテインメント市場も急拡大するインド。その中でも日本のアニメは、若年層を中心に絶大な人気を誇る。しかし、海賊版の横行や独自の文化・商習慣など、海外企業にとっては参入障壁も高い。そんな中、2023年12月、同社が運営するアニメ専門配信サービス「アニメタイムズ」をインドのAmazonが運営するPrime Videoのサブスクリプション内にてスタートさせた。

「動画配信元年」に誕生したアニメタイムズ社、次なる舞台はインド

日本国内では2021年に、Prime Videoのサブスクリプションとして、月額437円で豊富なアニメ作品を提供し、多くのファンを獲得してきた。その成功体験を引っ提げ、グローバル展開の第一歩として選んだのがインドだった。

「インド市場は、若年層が多く、日本のアニメへの関心も非常に高い。一方で、価格に対する意識がシビアであることや、海賊版の問題も根強い。我々にとって大きな挑戦でした」と担当者は語る。サービス開始当初、価格は年額899ルピー（約1,500円）に設定。UI（ユーザーインターフェース）は日本版を踏襲しつつ、ローカライズにも力を入れた。

熱量と現実のギャップ：ローンチイベントでの教訓

サービス開始当初、まず取り組んだのは現地でのプロモーションイベントだ。若年層が多く集まるプネーの映画製作学校や、ムンバイの芸術系専門学校でイベントを開催。学生を中心に各会場200名以上が集まり、サービス紹介やアニメの試写会、コスプレ大会などを実施した。

「現地のファンの熱量は想像以上でした。試写会では日本の映画館さながらの歓声が上がリ、用意した英語のスピーチよりも『日本語で話してほしい』という声上がるほど。アニメで日本語を覚えたという学生も多く、日本のアニメグッズも大変喜ばれました」



試写では随所で大歓声上がる



映画製作向けの学校ならではの
大きな試写室に200名以上が参加

しかし、この熱狂がすぐに会員数に結びついたわけではなかった。帰国してデータを確認すると、思ったほど新規会員が増えていない。「熱量はあったのに、なぜだろう？」——このギャップが、次なる施策への大きな課題となった。

危機をチャンスに！ショッピングモールでのゲリライベント

転機となったのは、2024年4月にムンバイで計画していた「コミコン」（アニメの祭典）への出展が、諸事情によりイベント前日に急遽中止になったことだ。すでにブースの準備も進めていただけに、担当者は途方に暮れた。
ただインド人は絶対に諦めなかった。

まさに一晩がかりの突貫工事。印刷物も夜通しで手配し、翌朝にはブースが完成した。このショッピングモールは、「アニメタイムズ」がターゲットとする中間層以上が多く訪れる場所であり、結果的にこの「ゲリライベント」が大きな成功を収めることになる。

「特に効果的だったのが、サンプリングで配布した大きなショッピングバッグです。インドの一般的な袋よりもデザイン性・耐久性が高く、これを目当てに多くの方がブースに集まってくれました。バッグを持った人々がモール内を歩き回ることによって、自然と「アニメタイムズ」の宣伝にもなったのです」。



会員登録者にはアニメグッズをプレゼント



買い物した商品を入れられるショッピングバッグをサンプリング
ショッピングバッグをもらったお客さんが歩く宣伝塔となり大盛況に

この経験から、ショッピングモールでの展開に手応えを感じた同社は、その後もインド各地のショッピングモールで小規模なブース展開を継続的に行っている。

現地との連携とローカライズの深化

インドでの活動を通じて、現地企業やコミュニティとの連携の重要性も再認識したという。ナーグプルでは地元のアニメクラブと提携し、彼らが主催するイベント「Coscon」に冠スポンサーとして参加。約2000人を集めたこのイベントでは、グッズ販売も試行し、大きな反響を得た。また、この頃に価格も月額69ルピー（約120円）に改定しました。



イベント終盤は参加者全員で某名台詞&ポーズ

ローカライズに関しても、当初は字幕が中心だったが、インドでは吹き替えの需要が高いことを実感。現在はヒンディー語をはじめとする現地語への吹き替え対応を強化している。「識字率の問題もあり、字幕よりも吹き替えの方が圧倒的にリーチしやすい。現地の声優さんを起用した吹き替え版は大変好評です」と担当者は語る。

インドでのビジネス展開で印象的だったのは、現地スタッフやパートナー企業の「諦めない姿勢」と「驚異的なスピード感」だという。

「コミコン出展中止の際もそうでしたが、何か問題が起きても『ノー』とは言わず、必ず代替案を見つけて実行してくれます。ブース設営が一晩で完了したのも、彼らの尽力のおかげです。一方で、時間に対する感覚は日本と異なり、イベント開始が大幅に遅れることも日常茶飯事。良くも悪くも、そのダイナミズムがインドビジネスの面白さでもありますね」。

価格戦略も常に模索中だ。当初は年間契約のみだったが、より加入しやすい月額制を導入。さらに、初月割引や1ルピーキャンペーンなど、様々な施策を打ち出している。「インドのユーザーは価格に非常に敏感。しかし、良いコンテンツには対価を払うという意識も確実に芽生えつつあります」。

海賊版との戦い、そして未来へ

インド市場最大の課題の一つが、海賊版の蔓延だ。「進撃の巨人」のような人気作品も、公式配信前に海賊版で視聴している人が大半というのが現状だという。「イベントでファンと話すと、悪びれもなく『パイレーツで見たよ』と教えてくれます（笑）。しかし、だからこそ正規のルートで、高画質・高音質で楽しめる「アニメタイムズ」の価値を伝えていく必要があると考えています」。

アニメタイムズ社は、今後もインド各地でのイベント開催や、現地企業との連携を強化していく方針だ。また、日本のアニメ制作会社やスタジオと協力し、インド市場向けのコンテンツ展開も視野に入れているという。

「インドのアニメ市場は、まだまだ成長の初期段階。しかし、そのポテンシャルは計り知れません。我々はこの巨大市場で、日本のアニメカルチャーをさらに広め、現地のファンと共に新たな熱狂を生み出していきたい」と、担当者は力強く語った。

アニメタイムズ社のインドでの挑戦はまだ始まったばかり。海賊版という強大な壁に立ち向かいながら、現地の熱気を追い風に、日本のアニメがインドの大地でどのような花を咲かせるのか。その成長物語から目が離せない。



インド市場への挑戦が評価され、『CJPFアワード2025』プロジェクト（事業）部門にて準グランプリを受賞

『アニメタイムズ社』とは

アニメタイムズ社は、エイベックス・ピクチャーズ、講談社、集英社、小学館をはじめとする13社が出資し設立され、日本アニメのグローバル展開を推進するとともに、国内ではアグリゲーターとしての役割を担い、多様な作品を統括・配信しています。

その一環として、“Anytime アニメと過ごそう”をキャッチフレーズに、2021年8月より日本においてPrime Videoのサブスクリプションにて定額映像配信サービス「アニメタイムズ」を開始しました。

現在では公式YouTubeチャンネルとともに、最新の話題作や名作アニメを配信し、日本国内のファンに向けた展開を続けています。

さらに、114の国・地域で日本の公式アニメグッズを取り扱う越境EC「アニメタイムズSTORE」も展開中です。

公式サイト： <https://animetimes.co.jp/>

アンドラ・プラデシュ州

概要

- * 州都：アマラヴァティ
- * 人口：4, 9 5 8 万人（2011年国勢調査）
（2021年推計：5, 2 7 9 万人）
- * 面積：1 6 万 2 0 5 km²
（県（District）：2 6）
- * 識字率：6 7. 3 5 %（2011年）
（男性：74.8%、女性：60.0%）
- * 宗教別人口比率：ヒンドゥー教(90.9%)、
イスラム教(7.3%)、キリスト教(1.4%)
- * 主要言語：テルグ語（州公用語、89%）、
ウルドゥー語(6.6%)、タミル語（1.0%）
（宗教、言語は2011年国勢調査に基づく）



政治

（1）州政府

- * 州知事：サイード・アブドゥル・ナジール（Syed Abdul Nazeer）（2 0 2 3 年 2 月～）
- * 州首相：チャンドラバブ・ナイドゥ（Chandrababu Naidu）（T D P）（2 0 2 4 年 6 月～）

（2）州議会：二院制

下院（定員：1 7 5）（2 0 2 9 年 4 月任期満了）

- * 与党：テルグ・デサム党（T D P）1 3 5、ジャナセナ党（J n P）2 1、
インド人民党（B J P）8

- * 野党：Y S R コングレス（Y S R C P）1 1

上院（定員：5 8）（任期 6 年、2 年毎に 3 分の 1 改選）

- * 与党：T D P 1 0、J n P 2、B J P 1

- * 野党：Y S R C P 2 8

（3）概況

アンドラ・プラデシュ州とテランガナ州が分離された 2 0 1 4 年に実施された州議会選挙で、T D P が勝利し、チャンドラバブ・ナイドゥが分離後初の州首相に就任。2 0 1 9 年選挙では、Y S R コングレスが大勝し、ジャガン・レディが州首相に就任したが、2 0 2 4 年選挙では、B J P、J n P と連合を組んだ T D P が大勝し、ナイドゥ首相が返り咲いた。ナイドゥ首相率いる T D P は、中央の N D A 連立政権にとって政権維持のためにも欠かせない重要な存在であり、州政府は中央政府からの大きな協力を得て、円滑な政権運営を行っている。

日本との関係

その他

インド勤務を振り返って

読売新聞 浅野友美（元ニューデリー特派員）
日印協会個人会員

私は読売新聞のニューデリー特派員として、2022年5月末から25年5月末までインドで駐在生活を送り、南アジアの7か国の取材を担当した。新型コロナウイルスの流行がようやく下火になり、世の中が正常化しつつあった頃に、人生で初めて天竺の地に足を踏み入れた。今回、日印協会から寄稿の機会を頂いたので、軍事衝突が記憶に新しいインドとパキスタンとの関係性を中心に滞在中の出来事を振り返っていききたい。

印パが武力行使に踏み切ったのは、駐在期間も佳境に差し掛かる今年5月上旬だった。両国が領有権を争うカシミール地方のインド支配地域で4月22日、武装集団が観光客や地元住民の計26人を銃撃するテロが起きており、インド人やネパール人が殺害された。インド側は、この武装集団をパキスタン政府が支援していたと断定し、パキスタンへの報復を示唆していた。それを最初に実行したのが、5月7日未明だった。

軍事攻撃は、インドが「テロ施設を標的にした」と主張する7日未明のミサイル攻撃にとどまらず、カシミール地方を分割する実効支配線沿いでの両国軍による交戦や、カシミール地方や両国の領土への無人機（ドローン）攻撃にもその後広がった。10日未明には、空軍基地などの軍事拠点にも攻撃の手が伸びた。人数は定かではないが、双方に死傷者が生じ、建物なども損壊したとされる。米国の仲介もあってこの日のうちに即時停戦で双方が合意したが、これらの軍事行動が地元メディアで報じられる中で、私自身、心が大きくざわつくのを感じていた。比較的最近に取材で現地を訪れていたことが、最大の要因だった。

少し横道にそれるが、私は今年に入り、PUNJAB（パンジャブ）州のシーク教徒の動向を重点的に取材していた。周知の通り、インドはヒンズー教徒が8割を占めているが、パンジャブ州だけは例外的にシーク教徒が6割弱と多数派となっている。米国で今年1月にドナルド・トランプ氏が再び大統領に就任してから不法移民対策が強化され、本国に強制送還されるインド系移民の多くがパンジャブ州出身者だと知った。不法移民が信仰する宗教の内訳についての公式発表はなかったが、テレビニュースなどを見るとシーク教徒が大半で、送還中にターバンを外すことを強制されたと証言する人がいるということも判明した。

トランプ氏が不法移民に対して厳しい姿勢で臨んでいることは既に何度も報じられていたが、そもそもなぜこんなにシーク教徒が米国に憧れ、リスクを冒してまで渡航を試みるのかを解き明かしたいと思い、取材に着手した。

その中で2月下旬に訪れた集落の一つが、パンジャブ州にあるJALANDHAR（ジャランダル）だ。ここには、米国に渡って事業などで成功した人々の家が多く建っていた。特徴的だったのは、そうした人々の家の屋上に、飛行機や蒸気機関車、戦車などのオブジェが飾られていたことだ。成功を地元で誇示するためにそうした風習が約30年前から始まり、現在は物珍しさに観光客らも足を運んでいるという。ある近隣住民に頼んで屋上に上がらせてもらい、数々のオブジェが見渡せる光景をファインダーに収めた。周囲には小麦などの畑が広がり、住民が玄関先などで井戸端会議に明け暮れる牧歌的な地域だと、そのときは感じていた。

先述の印パ衝突に話は戻るが、インド主要紙ヒンドゥスタン・タイムズによれば、パキスタン軍が飛ばした複数のドローンによる攻撃で5月8日深夜に標的にされた集落の一つがこのジャランダルだった。パキスタン国境からの距離は約90キロもある。インド軍によってこれらのドローンは撃墜されて住民に直接の被害は及ばなかったが、夜間に避難を余儀なくされた住民もいたようだ。記事処理にあたっている最中は、両国軍などが発表する情報が次から次に入ってきてそれをさばくのに精一杯だった。特定の集落での出来事に注意を向ける余裕がなかったが、停戦合意後にそれまでの経緯を振り返る中で、あのときに集落で言葉を交わした人々の安全や不安な気持ちを案じずにはいられなかった。

インドに行ったことがある方々が通常イメージするニューデリーからパンジャブ州への移動ルートは、インディラ・ガンジー国際空港から、シーク教の聖地・黄金寺院があるAMRITSAR（アムリトサル）の空港への空路だ。しかしこの出張時には、取材を予定していた地点へのアクセスも考慮し、ウッタル・プラデシュ州のHINDON（ヒンドン）空港からパンジャブ州のADAMPUR（アダムプール）空港へ運航されている路線を利用した。いずれの空港も軍民両用だ。ヒンドン空港は、インディラ・ガンジー空港へ集中する旅客の分散のために最近活用が進められ、民間航空会社の路線が増えている。

ジャランダルから20キロ足らずしか離れていないアダムプールの空港はこぢんまりとしていたが、インド空軍の基地と一体のため、着陸時には各種戦闘機や演習用の施設が車窓から見えた。客室乗務員からは、安全保障上の理由で空港での写真撮影は禁止されているというアナウンスがなされた。一方で、駐機場にある商用機は私が乗ってきた機体のみ。

旅客ターミナルは真新しくはあったが、飲食店も客待ちタクシーもなく、ひっそりとしていた。迎えに来たタクシーの運転手は「この近くで何年も運転手をしているが、ここの空港に来たのは初めて」と打ち明け、空港周りの道路は整備がされず、しばらくはでこぼこ道に揺られながら中心街へ向かった。地元でもまだ影が薄く、十分に活用されていないことは自明だった。

そのアダムプールも、思いがけずと言っていいのかは分からないが、このパキスタンとの衝突で脚光を浴びた。パキスタン国営テレビP T Vは、5月10日にインドへの反撃としてパキスタン軍の戦闘機から発射されたミサイルが、アダムプール空軍基地にある防空ミサイルシステム「S 4 0 0」を破壊したと報じた。インドは2018年、S 4 0 0を5基購入する契約をロシアと締結し、既に3基が引き渡されている。ナレンドラ・モディ首相は停戦後の5月13日早朝にこの基地を訪れ、兵士たちの勇敢な戦いぶりを演説でたたえた。モディ氏が登壇した場所の背後には無傷のS 4 0 0が配置され、モディ氏は今回の軍事作戦でS 4 0 0が大きな役割を果たしたと強調した。パキスタン側からの情報が誤りだと言わんばかりの演出だった。もっとも、S 4 0 0の配備状況はリアルタイムでは公になっておらず、無傷のS 4 0 0がいつからそこにあったのか、パキスタンの攻撃で本当に何の損害も受けなかったのかは不明だ。



(アダムプール空軍基地でのモディ首相,2025年5月13日：インド政府提供)

私が驚いたのは、S 4 0 0がそこにあったことではない。モディ氏の周囲を埋めつくさんばかりに数百人とみられる兵士が参集していたことだ。氣勢を上げるモディ氏に合わせ、兵士たちは拳を突き上げていた。2か月半前に私が見ていたあの閑散ぶりは何だったのか。インド軍が空軍基地をパキスタンに隣接するパンジャブ州に置いているのは、安全保障の観点から本来は何の不思議もないことなのだが、こうした有事で全く異なる姿を見せるということに直面すると、今更ながら驚愕（きょうがく）させられた。

軍事に関わる少し硬い話が続いたが、ここからは少しノスタルジックな記述に入っていく。先ほどから私が振り返ってきた取材の舞台になっているパンジャブ州だが、同じ名前の州がパキスタンにもある。印パの分離独立の歴史をご存じの方には説明するまでもないが、独立前の英領インド時代は「パンジャブ地方」として一体で、インドとパキスタンがそれぞれ1947年に独立するに際して分割された。筆者が最初に訪れた「パンジャブ州」はむしろパキスタンの方だ。まさにこの分割によって当時インド側からパキスタン側へ、もしくはその逆の流れで移り住むことを余儀なくされた人々が、数十年経って故郷への再訪を望みながら両国政府の関係悪化により査証（ビザ）の取得が難航し、その願いの実現が阻まれているという実情を伝えるために、当事者の子孫や支援者に取材したときだ。2023年4月のことである。

インドに移ったシーク教徒らが通っていたパキスタンのパンジャブ州の古いシーク教寺院近くで取材相手から説明を受けている中、それまで数日間、全く音を発していなかった仕事用のスマートフォンから通話アプリWHATSAPP（ワッツアップ）の着信音が鳴った。あまり知られていないが、インドの通信会社のSIMカードを挿入したスマホは、ローミングをしてもパキスタン国内で通信することはできない。他の国のSIMカードだと問題なく通信ができるが、インドのものだけは安全保障上の理由で遮断しているようだ。なのに、そのスマホが反応したのだ。地図を確認すると、私がいる地点はインドとの国境から1キロほどしか離れていなかった。おそらくインドのパンジャブ州に設置されている電波塔が発する電波を拾ったためだと思われる。インドとパキスタンは隣国同士にもかかわらず、敵対関係により飛行機の直行便は一つも運航されておらず、空路では中東などを経由しないと移動ができない。「近くて遠い国」だと思っていたが、このスマホの1件があってその認識は私の中で覆された。

両国を陸路で結ぶ唯一の検問所があるワガ国境は、毎日行われている降旗セレモニーが観光名所として有名だ。私は印パそれぞれのサイドから異なる時期に観覧したことがあり、それぞれの愛国心が渦巻く中で、相互に敬意を払う厳粛な所作に非常に感銘を受けていた。



（降旗セレモニー（奥がパキスタン）2023年10月）



(降旗セレモニー、インド側観覧施設)

24年2月に2回目のパキスタン出張を敢行した際は、このワガ国境の検問所から入国したが、両国の兵士や係官の連携がスムーズだったため、何のストレスも感じずに自ら徒歩で国境を越えられた。日本政府のあるベテラン外交官はここを「世界の国境で最も平和な地点の一つだ」と称賛していた。

そのワガ国境は、今年4月のカシミール地方でのテロ以降の両国政府の決定によって閉鎖が続き、原則往来ができなくなっている。インド主要紙タイムズ・オブ・インディアによると、セレモニーは5月20日に再開したが、普段は開放されていた国境上の門は閉まったままだ。両国軍の代表者による握手も取りやめているといい、悪化する両国関係が影を落とした状態が続く。

1度足を運んでみれば一目瞭然なのだが、パンジャブ州の農村部はインド側もパキスタン側も、一面に広がる青々とした畑や原っぱにヤギなどが放牧されており、うり二つだ。景色だけ見れば同じ国だと錯覚させられる両国が、独立から75年以上が経っても緊張が緩和されるどころか対立を深めていることには、様々な事情や双方の言い分があるにせよ、ただただ残念で仕方がない。停戦合意により両国間の軍事行動は一時的に停止しているものの、経済的措置などで強硬姿勢は崩しておらず、関係改善に向かう兆候がないままに私の任期は終了した。今後を現地で見届けることはもうかなわないが、悲劇を生んだ過去の歴史を教訓に、両国が外交努力を重ねることを期待して日本からその動向を見守りたいと思う。

最後に、ニューデリー赴任を終えた私の現況について少し記しておく。私は出身地の大阪に戻り、大阪の政治・行政を中心とした取材を担当している。ご存じの通り、この街は現在、大阪・関西万博で盛り上がっている。私も今月中旬に早速、万博会場に行ってみた。パビリオン巡りをする中で、インド赴任経験者として外せなかったのがインド（バーラト）館だった。開館こそ万博の開幕日には間に合わなかったが、国花である蓮の花をモチーフにした外観の建物に入ると、多数の来場者でにぎわっていた。世界4番目に月面着陸に成功した無人月探査機「チャンドラヤーン3号」や、ジャム・カシミールで今月上旬に開通した高さ世界一（359M）の鉄道橋「シェナブ橋」の縮尺模型など、自分が特派員時代に動きがあったプロジェクトが日本でも発信されており、懐かしさが込み上げた。社会基盤整備や宇宙開発など、日本にいてはなかなか実感できないインドのダイナミックな取り組みを私自身も当時に実感していた。今後もインドから果敢な挑戦が打ち出されていくことを、約6000キロ離れた日本から楽しみにしている。

私がインドに赴任していた3年間、現地や日本からご支援いただいた皆様に心から御礼を申し上げ、この寄稿の締めくくりとしたい。
なお、ここに記した見解は全て個人的なもので、社の受け止めや方針とは必ずしも一致していないことを付記しておく。



（国防省主催の「防衛博覧会」を取材する筆者（ガンディナガル、2022年10月））

インド独立運動と日本の絆を辿る

—ラス・ビハリ・ボース研究所&代表団による訪日ツアーの記録—

個人会員 渡邊太一

インド独立運動の歴史において、日本は決して傍観者ではなく、数々の志士たちが命を懸けて連携し合った舞台でもありました。インド人有志によって2025年5月～6月に実施された、『遺産への敬意：ラス・ビハリ・ボース顕彰訪日ツアー』では、こうした歴史的絆を再発見・再確認することを目的として、インドから学者、青年有志、文化活動家ら36名が参加し、11日間にわたって日本各地を巡りました。

この度の訪日ツアーの一つ目の主要テーマは、インド独立とアジアの連帯のために尽力したラス・ビハリ・ボース氏（中村屋のボース）とラージャ・マヘンドラ・プラタープ・シン氏（インド亡命政府大統領）の軌跡を辿り、両氏の貢献を顕彰するとともにその精神を次世代に継承することでした。両氏が日本で築いた人脈や文化交流は、今日のインドと日本の友好関係の土台のひとつとなったと言えるでしょう。また、もう一つの主要テーマとして、インド独立運動に寄与した日本人やその遺族への感謝と敬意を表すとともに、次の世代に歴史的記憶を継承するという目的がありました。訪日団代表ヴィジェイ・パテル氏は、「これは自由と文化を結ぶ精神的な対話の旅であり、『自由とは文明の再生である』という理念を胸に刻むかけがえのない機会となりました」と話していました。

以下はヴィジェイ・パテル氏より共有された探訪記の和訳となります。

2025年日本におけるラス・ビハリ・ボース顕彰の記録：偉大なる先人たちを称えて
主催：ラス・ビハリ・ボース研究所、新印度謝恩会（アビナヴ・バーラト・アーバル・パルヴ・バーラト）

共催：HSS有志、日本チーム・ネタジー、インディアンソーシャルソサエティ、ウットカルシュ・マンチ（インド振興フォーラム）、バーラト・ジャパン・マイトリ・マンチ（印日友好会）、在日インド大使館関係者ほか

日程：2025年5月23日～6月5日

参加者：インド人学者、青年有志、文化・社会活動家ら計36名



（多磨霊園 ジョージ大使と墓参）

感謝と追悼の巡礼

ラス・ビハリ・ボース研究所および新印度謝恩会がインド独立運動の静かなる設計者、ラス・ビハリ・ボース氏に敬意を表し、その歴史的意義を再確認するために開催したこの度の訪日ツアーは、正に魂を揺さぶる巡礼となりました。

本ツアーでは、ボース氏に加えて、頭山満、藤原岩市両氏、ならびに福岡の杉山茂丸・杉山龍丸両氏ら、印日友好関係に尽くした日本の先人たちの尽力にも光が当てられました。また、国境を超えてインド独立に貢献したもう一人の革命家、ラージャ・マヘンドラ・プラタープ・シン氏との連携についても探求しました。

福岡やインドにおいて環境・国際協力活動に尽力した杉山茂丸の孫の杉山龍丸氏も、ボース氏や頭山氏の理想を現代に引き継ぐ重要な人物でした。インドの緑の父（GREEN FATHER）と呼ばれた龍丸氏の活動は単なる自然保護にとどまらず、印日の友好と相互理解を深化させる大きな力となりました。

インドから日本へ——ラス・ビハリ・ボースの軌跡

ラス・ビハリ・ボース（1886–1945）は、1912年に英国総督暗殺未遂事件に関与した後、英植民地政府の追跡を逃れて1915年に日本へと亡命したインドの革命家です。日本では、頭山満氏、杉山茂丸氏をはじめとする玄洋社及び黒龍会の関係者など、アジア主義者たちの支援を受けて活動を継続しました。彼はインド国民軍（INA）の設立に貢献し、日印の革命家たちを結びつける要となりました。

1918年には、日本の相馬愛蔵・黒光夫妻の娘である相馬俊子と結婚し、日本国籍を取得。二人の間には政英と哲子の2子が生まれましたが、俊子は1924年に病没、政英も第二次世界大戦中に戦死しています。ボース氏は最期までインド独立のために身を捧げ、1945年に東京で逝去しました。

アジア主義の支援者：頭山満と藤原岩市

頭山満（1855–1944）は、アジアの連帯と西洋帝国主義からの自立を掲げた日本の思想家・政治運動家で、玄洋社および黒龍会の創設者でもあります。1915年に来日したボース氏を庇護し、杉山茂丸らと共に日本での滞在を支援。彼の影響力により、日本の各方面にインド革命家の受け入れ態勢が整えられました。頭山氏の支援は、ボース氏の活動継続を可能にし、インド独立運動にとって極めて重要な意義を持ちました。

藤原岩市（1908–1986）は、旧日本陸軍の将校であり、1941年にF機関を設立し、英領インドおよび東南アジアの独立運動を軍事的に支援しました。藤原氏の尽力により、スバス・チャンドラ・ボース氏（ネタージー）が率いるINA（インド国民軍）の編成と活動が大きく前進し、印日の革命的連携は頂点を迎えました。

共闘の精神とその遺産

ラス・ビハリ・ボース、頭山満、藤原岩市——この三者の協働は、アジア主義の理念と、植民地支配への共通の抵抗意識に基づいたものでした。彼らの行動は、インド独立運動に対して精神的・物質的支援を提供し、同時に日本とインドの関係を歴史的に深化させた貴重な記録となっています。

また、福岡やインドにおいて環境・国際協力活動に尽力した杉山龍丸氏も、ボース氏や頭山氏の理想を現代に引き継ぐ重要な人物でした。彼の植林活動や文化交流は、単なるエコロジー運動を超え、文明間対話としての意味合いを持ち、今なお印日両国における継続的な友好関係の象徴となっています。



(半蔵門 代表団と筆者)

ボース氏及び頭山氏像の制作・贈呈

ラス・ビハリ・ボース氏、頭山満氏、藤原岩市中将の像などが、インドの職人により制作され、今回のツアーにおいて印日友好と敬意の印として各地の関係者に贈呈されました。

杉山龍丸とインドにおける環境保護活動

杉山龍丸氏は1919年に福岡で生まれ、第二次世界大戦中は旧日本陸軍の将校として従軍しました。戦後は環境保全活動に身を投じ、特にインドにおける砂漠化対策に力を注ぎました。また、イギリス統治時代にインドで失われた生活に必要な物づくりや農業の技術を学びに来日したマハトマ・ガンジーの弟子らの面倒を見ました。

その中には後にインド陶芸の父と呼ばれることになるS.K.ミルミラ氏がいました。1961年にはインド北部の乾燥地帯を視察し、現地政府および地域社会と協力して大規模な植林活動を開始。特に、パンジャブ州からパキスタン国境まで続く国道1号線沿い470キロにわたりユーカリを植林したプロジェクトは、荒地を緑地へと変貌させ、氏は「インドの緑の父」(GREEN FATHER)と称されるようになりました。杉山氏はまた、これらの活動を支えるために国際文化福祉協会 (ICWA) を設立し、資金調達と国際的理解の促進に努めました。しかし、日本政府や学界からの十分な支援は得られず、たびたび困難に直面しました。それでもなお、彼の活動はインドの農業・環境政策に大きな足跡を残し、今日においてもその意義は色あせることがありません。

結び：時空を超えた魂の旅

今回の訪日ツアーは、私たちにとって単なる旅行ではなく、インドと日本が共有する歴史、勇気、兄弟愛を再認識するための精神的な旅でした。自由とは単なる政治的独立ではなく、文明的な覚醒であり、それは心からの感謝と共に語り継がなければなりません。

ラス・ビハリ・ボース氏、ラージャ・マヘンドラ・プラタープ・シン氏、ラダビノード・パール判事、そして日本の同志たちの光が、未来の世代を照らし続けることを願ってやみません。



(靖国神社 パール判事石碑)

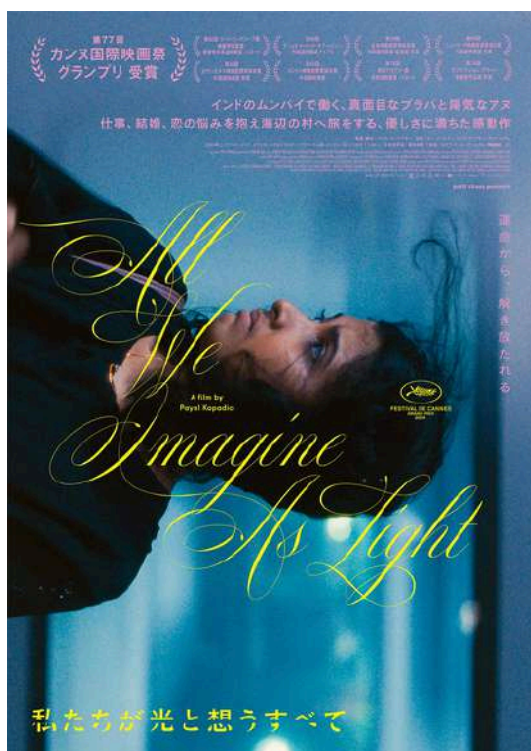
ありがとうございました。Jai Hind! Vande Mataram!

<インド映画公開情報>

映画会社セテラ・インターナショナルご提供

7/25公開 インド映画『私たちが光と想うすべて』マスコミ向けの試写会のご案内

昨年のカヌ国際映画祭で、インド映画としては初めてのグランプリを受賞、世界70カ国以上で公開、100を超える映画祭・映画賞にノミネート、25以上の賞を受賞しております。ムンバイで働く女性たちを、優しくあたたかいまなざしで描いた感動作です。パヤル・カパーリヤー監督はムンバイ生まれの女性監督で、今年のカヌ国際映画祭のコンペティション部門の審査員にも抜擢されています



インドの「おいしい」「安全」を
日本へお届けしつづけ、24年。

有限会社マカイバリジャパン (マカイバリ茶園アジア・日本総代理店)
 東京都中野区沼袋 4-38-2 Tel: 03-5942-8210 Fax: 03-5942-8211 makaibari_japan
 tea@makaibari.co.jp www.makaibari.co.jp
 ISHII TRADING PRIVATE LIMITED (インド会社) india_happyhunter
 E52 Hauz Khas Main Market, New Delhi-110016, INDIA info@ishii.co.in

元ネルー大学教授ブレム・モトワニ氏がメールマガジンにてインドからお届けする「インドの今」。
 ご登録は、マカイバリジャパンのホームページから。 www.makaibari.co.jp

ガネーシャ通信

日印協会顧問であり、インド工科大学ハイデラバード校の客員准教授を務める山田真美氏の著書『インド工科大学マミ先生の ノープロブレムじゃないインド体験記』が、第10回「斎藤茂太 旅の文学賞」最終候補および第7回「旅の良書」にノミネートされておりますことを皆様にお知らせします。

本書は、2024年9月号でもご紹介しましたが、改めてご案内いたします

『インド工科大学マミ先生の ノープロブレムじゃないインド体験記』

著者：山田真美 出版：笠間書院

定価：本体1800円（税別）

ISBN978-4-305-71023-9



Googleやマイクロソフト、IBM、スターバックスなど、世界的企業のトップにはインド系の人々が多くいます。その背景には、インド工科大学（IIT）の存在があります。IITは、世界中に優秀な人材を輩出し続ける技術大国インドの超エリートが集まる大学です。著者はこのIITで授業を持ち、インドとその人々の実態、エリート大学生たちの素顔を描いています。

著者とインドの縁は、20歳の女子学生時代、バスの添乗員のアルバイトでインドの国会議員団と出会ったことから始まります。

その後、インドマジックを研究するために渡印し、「マンゴーの木マジック」ができるマジシャンを探してインドを一周しました。

インドでの生活は、「ノープロブレム」と言いながらも問題が続出。アパートの壁が突然壊れたり、車と運転手が消えたり、部屋が洪水になったりと、トラブルが絶えません。しかし、著者はそんなインドにますます惹かれていきます。

また、IITの学生たちとの交流も描かれています。厳しい競争を勝ち抜いた彼らは、勉強に明け暮れ、自殺率も平均より高いと言われています。「ドラえもん」の歌を合唱する授業では、思わずほろりとさせられます。

この本は、著者のインド愛が満ち溢れており、読者もインドが気になり、いつの間にか好きになっていることでしょう。

日印協会からのご案内 会員限定「天竺茶話会」

講師の方を招いて、あらかじめ決めたテーマで参加者の方々と話し合うお茶会です。

インド通の方、もっともっとインドについて知りたい方、インドについて詳しくなりたい方、皆様のご参加をお待ちしております。
どうぞお気軽にご参加ください。

- 《テーマ》 「インドの食文化」
- 《講師》 小磯千尋氏（亜細亜大学国際関係学部教授）
- 《日時》 2025年7月11日（金）時間：14時00分-15時30分
（受付開始13時45分）
- 《会場》 公益財団法人日印協会 会議室
東京都千代田区麹町1-6 麹町保坂ビル 6階
- 《定員》 約18人※定員数になり次第、締切らせて頂きます。
- 《参加費》 お茶菓子とお茶代 1,000円(当日現金)
- 《お申し込み》 メール「partner@japan-india.com」
または、電話 TEL: 03-6272-4408



公益財団法人日印協会

住所： 〒102-0083 東京都千代田区麹町1-6 麹町保坂ビル6階
 電話番号： 03-6272-4408 ファックス： 03-6272-4135
 メール： partner@japan-india.com
 ホームページ： <https://www.japan-india.com>
 MJIA(Monthly Japan-India Association)
 2025年6月号（2025年6月27日発行）
 発行人：齋木 昭隆 編集人：末永 繁一（事務局長）



<法人会員一覧>

2025年6月23日現在 (50音順)

特別法人会員 70社

株式会社 朝日新聞社
ARMS株式会社
医療法人社団 育健会
株式会社伊藤園
伊藤忠商事株式会社
ウェブスタッフ株式会社
弁護士法人 瓜生・糸賀法律事務所
エア・ウォーター株式会社
株式会社エイチシーエル・ジャパン
株式会社NTTドコモ
株式会社川内美登子・植物代替療法研究所
キャノン株式会社
蔵町工業株式会社
黒崎播磨株式会社
株式会社グローバルヒューマニー・テック
国際縄文学協会
国際スポーツ振興協会
公益財団法人 国際文化会館
小島国際法律事務所
株式会社小松製作所
サントリーホールディングス株式会社
ジェンパクト株式会社

ジャパンベガサスツアー株式会社
株式会社シンリョー
スズキ株式会社
住友商事株式会社
株式会社西武・プリンスホテルズワールドワイド
世界開発協力機構
世界芸術文化振興協会
全日本空輸株式会社
総合警備保障株式会社
双日株式会社
第一三共株式会社
第一生命ホールディングス株式会社
大日本印刷株式会社
株式会社大和証券グループ本社
千代田化工建設株式会社
ティー・アイ・シー協同組合
株式会社ディー・エヌ・エー
株式会社TTJ・たちばな出版
一般財団法人東京芸術財団
株式会社東芝
株式会社東横イン
戸田建設株式会社
豊田通商株式会社
鳥飼総合法律事務所

株式会社日新
日本航空株式会社
株式会社日本視聴覚社
日本製鉄株式会社
日本タタ・コンサルタンシー・サービス株式会社
東日本旅客鉄道株式会社
株式会社菱法律・経済・政治研究所
株式会社日立製作所
フィデル・テクノロジーズ株式会社
株式会社フジタ
富士フィルム株式会社
株式会社プレジィール
ボラリス・キャピタル・グループ株式会社
松田綜合法律事務所
丸紅株式会社
株式会社MIXI
株式会社ミスズ
三井物産株式会社
三菱商事株式会社
民間外交推進協会（FEC）
武蔵野メディカル株式会社
株式会社メタルワン
郵船ロジスティクスグローバルマネジメント株式会社
株式会社ライズ・ジャパン

一般法人会員 144社

株式会社IHI
株式会社IPパートナーズ
株式会社アシックス
アセアン・ワン株式会社
A'ALDA PTE. LTD.
株式会社 安藤・間
アーチ株式会社
一般社団法人 ART OF LIVING
いすゞ自動車株式会社
インド日本商工会
株式会社INPEX
エア・インディア リミテッド
SBSホールディングス株式会社
株式会社エトワール海渡
株式会社FTO
エンビジョンエンタプライズソリューションジャパン(株)
冲印友好協会
株式会社 オリエンタルコンサルタンツグローバル
株式会社オリエンタルランド
オーウィル株式会社
株式会社オープンハウスグループ
加賀電子株式会社
鹿島建設株式会社
カナデビア株式会社
亀田製菓株式会社
関西学院大学
株式会社クボタ
株式会社熊谷組
株式会社 啓文社
株式会社 ケー・アンド・エル
鴻池運輸株式会社
株式会社交洋
株式会社講談社
酒井重工業株式会社
株式会社 サカタのタネ
公益財団法人笹川平和財団
株式会社 サンウエル
山九株式会社
三洋化成工業株式会社
G-8 INTERNATIONAL TRADING 株式会社
JFEスチール株式会社
JGREEN POWER PRIVATE LIMITED
株式会社システムコンサルタント
株式会社静岡ガス
株式会社静岡銀行
有限会社シタール

品川イーストクリニック
有限会社ジューストラベル
株式会社商船三井
鈴与株式会社
住友重機械工業株式会社
住友電気工業株式会社
住友不動産株式会社
積水ハウス株式会社
セコム医療システム株式会社
ZEUS LAW
医療法人社団創生会 町田病院
SOMPOホールディングス株式会社
大成建設株式会社
ダイキン工業株式会社
株式会社大創産業
株式会社タマイインベストメントエデュケーションズ
学校法人都築育英学園
露木興業株式会社
TMI総合法律事務所
ティー・ディー・パワーシステムズ・リミテッド
株式会社 帝国ホテル
帝人株式会社
株式会社テクノロジーONE
株式会社テレビ朝日
株式会社テレビ東京
株式会社デンソー
TECH JAPAN 株式会社
株式会社TBSホールディングス
株式会社電通
東京海上日動火災保険株式会社
東洋アルミニウム株式会社
東レ株式会社
飛鳥ホールディングス株式会社
トヨタ自動車株式会社
株式会社トピア
内外トランスライン株式会社
株式会社中村屋
株式会社ナベル
株式会社ニトリホールディングス
株式会社ニフコ
西村あさひ法律事務所
日印ビジネス支援協会株式会社
日産自動車株式会社
日精エー・エス・ビー機械株式会社
NIPPON EXPRESSホールディングス株式会社
日本信号株式会社
日本経営ウィル税理士法人
株式会社 日本経済新聞社
日本航空電子工業株式会社

公益財団法人日本交通公社
一般財団法人 日本国際協力センター
日本テレビ放送網株式会社
日本電気株式会社
日本放送協会
株式会社 日本マルコ
日本郵船株式会社
日本電子株式会社
野村不動産株式会社
野村ホールディングス株式会社
株式会社ノリタケカンパニーリミテド
ハイクール ジャパン
株式会社博報堂
株式会社 阪急交通社
阪和興業株式会社
パナソニックホールディングス株式会社
株式会社日吉
株式会社ピーアイ・ジャパン
BEYOND NEXT VENTURES株式会社
株式会社BS日本
BLS INTERNATIONAL SERVICES LIMITED
公益財団法人フォーリン・プレスセンター
富士通株式会社
株式会社フジテレビジョン
富士電機株式会社
BAKER TILLY ASA INDIA LLP
国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学
フォースバレー・コンシェルジュ株式会社
株式会社ボルテックス
前田建設工業株式会社
株式会社みずほ銀行
三井住友海上火災保険株式会社
株式会社三井住友銀行
三菱重工業株式会社
株式会社三菱UFJ銀行
株式会社ミツバ
一般社団法人MEDICAL EXCELLENCE JAPAN
森・濱田松本法律事務所
株式会社ヤクルト本社
株式会社安井建築設計事務所
ヤマハ発動機株式会社
ヤマヤエレクトロニクス株式会社
ユーピーエルジャパン合同会社
読売新聞東京本社
ラリス株式会社
学校法人立命館
ロジスティード株式会社
YKK株式会社
医療法人社団和風会

JAPAN AIRLINES



新しい翼で、世界の空へ。

JAL 羽田-デリー線、成田-ベンガルール線
好評運航中!



おかげさまでJALグループは、8年連続で
世界最高ランクの5-STAR AIRLINE*に認定されました。
* 2025年SKYTRAX社認定



明日の空へ、日本の翼